

里山に暮らす野生動物との共生をめざして

森正恵・中島美香（一般社団法人里山いきもの研究所）

はじめに

私たち一般社団法人里山いきもの研究所（以下、里いき）は、平成26年度に結成された団体です。次代を担う子どもたちを始めとする一般の方々に里山の魅力を伝え、より多くの人たちが里山に興味関心を持ったり、里山で自分たちなりの目的に応じた活動をしたりするための力になりたい、そして、里山で起こっている人と野生動物との軋轢や問題を解決したい、という共通の志を持つメンバーが集まって設立されました。

現在のスタッフは9名。野生動物調査員、博物館や自然公園のスタッフ、専門学校講師や元小学校教諭、元行政職員、猟師、美術大学出身者など、専門分野も経歴も様々です。



写真1 ワークショップでは剥製などを使い動物の生態を正しく伝える

里いきってなにしているの

私たちは、主に兵庫県のを歩いて里山の大・中型哺乳類の調査をしつつ、調査を通じて経験した里山の楽しさや野生動物たちの魅力を伝えるため、県立や国営の自然公園、博物館等でワークショップなどを実施しています（写真1）。

その他に、林縁環境を調べたり、農村地域に暮らす方々から「獣害」に関する実態や対策状況について、お話を伺ったりもしています。

「獣害」とは、「野生動物による様々な被害」のことです。具体的には、ニホンジカ、ニホンイノシシ、ニホンザル、アライグマによる農業被害（写真2）、ニホンイノシシやツキノワグマによる人身被害および精神的被害、ニホンザルやアライグマの家屋への侵入による生活被害などが挙げられます。このような獣害を起こしてしまう大・中型哺乳類が生息する里山や森林と隣接している地域では時に深刻な問題となりますが、そういった地域では、科学的データを元に様々なアイデアや技術を駆使して、地域の現状と獣種に合わせた多様な対策を取ることが求められます。

スタッフの中には、農村地域に移住し、シカやイノシシを捕獲する「有害鳥獣捕獲」等の獣害対策に実際に取り組んでいる者もいます。



写真2 シカによる稲の食害

伝える時に大切にしていること

私たちは、獣害に関する調査を実施する中で最前線の現状を通して、獣害に対する地域の方々への苦労や対策への工夫、問題解決に向けた地域ごとの課題などを目の当たりにすることがあります。

そしてそれらを、獣害とは直接関わりの無い方々に「伝える」ということも、私たちの大事な使命であると考えています。

人と野生動物との問題は、人間の社会生活の変化が引き起こした、我々自身が解決すべき問題であり、自然環境における生態系のバランスに影響を及ぼす重大な問題であるからです。

「伝える」活動としては、先に挙げたワークショップの他に、企業や行政機関の主催する研修会への講師やスタッフの派遣、野生動物保護管理を学ぶ専門学校での講義や実習なども行っています。伝える相手や場は様々ですが、獣害の現状や課題を伝えると同時に、厳しい自然界で命を輝かせて生きる野生動物の魅力について伝えることも、大切にしています。

里山に暮らす野生動物との共生を目指して -今回の展示について-

獣害を起こす野生動物の代表格であるシカとイノシシについてみると、兵庫県での被害金額はシカがおよそ1.2億円、イノシシがおよそ2億円（兵庫県2016）で、シカについては全国3位（北海道を除く）となっています。

被害金額としては減少傾向にありますが、一部地域では依然として、野生動物による農業被害は深刻であるとの声が大きく、以前は被害がなかった地域に新たに被害が発生している事例も増えています。

獣害の対策は、田畑や林縁に柵を張る、有害鳥獣を捕獲する、常に柵や罟を見回りしメンテナンスする、里で姿を見れば追い払うなど、膨大な労力と費用がかかります。また、地域全体で取り組まないと、個々バラバラにやっていたのではなかなか効果が出ないことがあります。マイナスをゼロに戻すだけの地道な作業に、農業を諦めてしまう方もいます。

そのような中で、どう野生動物たちと共生していけばよいのか？そもそも共生とはどういう状況を指すのか？人の数だけ答えがあるかもしれません。

今回の共生のひろばでは、里山を中心に生じている人と野生動物との問題について知ってもらい、その原因は何であるのか、どのような対策が必要なのかを来館された方にわかりやすく伝えるため、立体的な展示で里山の風景を表現しました（写真3, 4）。

この展示を通じて、来館された方々に、獣害問題を解決するためにはどうすればよいのか、自分ができることは何か、といったことについて考えてもらえるきっかけとなれば幸いです。



写真3 どうして獣害が起こるのかを立体で表現



写真4 シカの骨格標本と里いきの活動も併せて紹介

おわりに

里山に息づく「いきものたち」に思いを馳せ、その生き様を想像してみることで、自然的、地理的、社会的な環境としての「里山」と自分との「つながり」が見えてくるのではないかと私たちは考えています。里山いきもの研究所は、その「つながり」を創るための活動を今後も続けていきます。

HP:<http://satoiki.sakura.ne.jp>

Facebook:<https://www.facebook.com/satoyamaikimono/?ref=bookmarks>